

傾向スコアを用いた除籍資料予測の試み

橋本郷史（東邦大学医学メディアセンター）

Q1. 貸出数など利用率を示す量を説明変数に使うことは適当でないと考えたのか？

A1. 今回の試みではなるべく機械的にシステムから抽出可能なものを使用した。現行システムでは貸出数、利用率の抽出ができず（過去データの集計作業が必要）、試算はしてみたが変数として適当ではなかったこと、手間がかかることから設定対象外とした。蔵書の分類別冊数、各分類の全体に占める割合なども変数に導入すると、更に良い予測が可能と思われるが、まずは機械的にシンプルに使える数値から変数を設定した。

Q2. 公共図書館でも課題があり、カーリルでも除籍の支援を実施している。全国的な除籍率、貸出率のグローバルなデータがあれば、何かに使用できるか。

A2. 今回は単館の結果で、変数等は他にそのまま使用できるものではない。全国的なデータは、公共図書館についてはグローバルな傾向が見られるかもしれないが、館種、地域、規模などにより差があると思われる。いずれにしても、そのようなデータがあれば興味深い。

Q3. 説明変数に指定した要素の取得はどのようにされたのですか。図書館システムの書誌情報から該当する情報を抽出するという感じでしょうか。

A3. システムの書誌情報や所蔵情報から、資料の生存時間（データ登録～除籍）、版次、分類などを抽出した。なるべく機械的にしたかったが、単著かどうかなどの判断には人の手も使用した。

Q4. カーリルさんのご質問を聞いて、除籍でアクセスできなくなる資料の存在が全国的に明らかになること、書物の完全なる消失を防ぐシステムができるといいなと思って拝聴しました。ありがとうございました。

A4. （事後回答）カーリルさんの作成したシステムで、ISBNなどを流し込むことで、資料の所蔵館数や所蔵館の館種（県立図書館、国会図書館など）を調べることができるようです。公共図書館の除籍の際にこういった作業を行うことが一般化されれば、特定の資料に全くアクセスできなくなるような事態をある程度防げるのでは、と感じました。